

2018・2019年度 第5回 神奈川県産業教育審議会概要
令和2年7月22日(水) 14:00~16:30 合人社日本大通7ビル 503会議室

【出席者】◎角田 浩子、○杉山 久仁子、村木 薫、佐藤 治、渡邊 二治子、浦尾 和江、
塚田 佳満、目迫 公雄、今井 勉、倉田 寛、熊坂 和也、森 有作

1 事務連絡(事務局)

- ◇資料確認
- ◇定数確認
- ◇会議の公開について

2 神奈川県教育委員会あいさつ(濱田指導部長)

- 新型コロナウイルスについて、県立高校及び県立中等教育学校については、県知事からの要請により、3月当初から臨時休業となり、さらに4月早々の国による緊急事態宣言を受け、5月末まで臨時休業を行った。6月からは、分散登校や時差短縮授業を行い、段階を追って教育活動を再開させている。今月に入ってから、感染者数の増加を踏まえ、時差登校をしつつ、教育活動は通常に戻していくなどの対応をしている。特に家庭学習で学ぶことが難しい専門学科の実習においては、学校再開後に優先して実施することとしつつ、看護科や福祉科の実習など他の生徒との接触が避けられない実習については、年間の指導計画を見直しながら、生徒の学習に遅れが生じないように対応している。
- 専門学科の広報について、今年度も専門学科を紹介するリーフレットを作成し、中学校2年生全員に配付した。また、11月14日(土)・15日(日)に、クイーンズスクエア横浜で開催予定であった、第23回神奈川県産業教育フェアは、新型コロナウイルス蔓延防止の観点から、大変残念ながら開催中止となった。現在、各校の生徒が中心となって、学科を紹介する動画を作成し、DVDにまとめて中学校に配付する準備をしている。完成したらお送りさせていただきたい。ぜひご覧いただければと思っている。
- デュアルシステムについて、本審議会における中間まとめの御報告をいただき、塚田委員に御尽力いただき、今年度はパイロット事業として、横浜市青葉区にある農場をフィールドとして、農業、工業、商業の生徒6名がお互いの学んできたことを活かし、課題解決につなげるデュアルシステムを実施している。

3 神奈川県産業教育審議会会長あいさつ(角田会長)

- このコロナ禍の状況においても、各校それぞれが努力されて、新しいことに挑戦されている姿も見せていただいている、感動しているところである。本当にピンチをチャンスにということで、この審議会でもさらに学校現場を応援できるような御発言などもいただけたらと思う。
- 産業教育フェアの中止は残念である。しかし、動画を制作なども楽しみである。また、学科を乗り越えたデュアルシステムのパイロット事業ということで、大きく発展していただきたい。
- 社会全体が新型コロナウイルスと共に生きていかなければならない。しかし、教育や生徒さんたちの学びを止めてはならない。新しい挑戦も随分行われていると思うので、最善の方法を模索しながら、これからの神奈川県の素晴らしい産業人材を育成していくことを皆様と考えていきたい。今回最後になるが、忌憚のない御意見をいただきたい。

4 審議

(角田会長)

- それでは事務局より最終報告案について御説明をお願いしたいと思う。

(小池グループリーダー兼指導主事)

- それでは、最終報告案について、御説明する。
- まず、「本県における地域等との協働における実践的な職業教育のあり方」について、背景をまとめている。
- 次に、地域との協働の必要性について、神奈川県立学校については、学校運営協議会制度、いわゆるコミュニティスクールを導入しており、さらなる発展が必要であることをまとめている。
- 次に、デュアルシステムの実施状況をまとめている。実施している多くの学校が教育課程に位置付けて、学校設定科目や課題研究といった授業の中で、一定の曜日のある時間決めて、長いところでは1年にわたって企業等での実習を行っている。
- これまでの課題としては、学科相互の交流や共同の取組みを通じての幅広い学びの機会が少ないということ、また、他学科の学びに触れる機会や自分が学んでいる分野と、他の分野の学びとの関連性を実感できる機会が少ないことも挙げられている。
- さらに、産業界との繋がりにおいても、学校と産業界が共通理解を図ることが十分にできていないということや、希望する生徒を受け入れる企業や店舗の確保やマッチングが難しいことも課題として挙げられている。
- 課題に対する方策として、実施に伴う具体の課題の把握、解決策の検討を行う場を組織として作ったほうが良いとの意見があり、仮称ではあるが、デュアルシステム協議会の設置を方策の一つ目に挙げた。
- また、各専門学科の学びを横断的に扱い新たな産業の創出にも結びつくような教育プログラムの検討を二つ目に挙げている。これについては、令和元年12月の中間まとめを踏まえ、各専門学科の枠を超えた取組みを推進するため、学科の垣根を越えた形で取組むデュアルシステムをモデル事業として、現在進めている。
- 今年度については、パイロット的な意味合いということで、塚田委員にも御協力をいただきながら、農業・工業・商業の県立高校生6名がこのパイロットプログラムに参加をしており、横浜市青葉区の農場フィールドとして、それぞれの学びの視点で課題解決に取り組む、1年間のデュアルシステムということで進めている。
- 次に、看護に関する学科のあり方については、まず、看護職員が対応する対象の多様性や複雑性が増しているということ踏まえ、これまで以上に高い能力が求められているという現状をまとめた。
- 本県唯一、看護に関する学科を設置している県立二俣川看護福祉高等学校では、これまで看護職に対し目的意識が高い生徒が入学しており、ほとんどの生徒が看護の上級学校へ進学しており、県内の様々な病院で看護師として活躍している現状がある。
- しかし、県立二俣川看護福祉高等学校においても、専門科目を25単位以上履修する必要があり、看護師の資格取得を目指して、上級学校への進学を希望している看護科の生徒にとって、共通教科・科目の履修単位数が、普通科に比べて少ないという実情は厳しいものであり、共通教科・科目を充実させることが求められているとまとめた。
- 次に、福祉に関する学科のあり方については、本県の介護福祉人材が非常に不足しているということが課題であり、将来の介護福祉を支える人材の確保の必要性をまとめた。
- 介護分野においても、ニーズの多様化、高度化に伴い、学ぶ内容の量とともに質の向上も求められている。また、福祉系高等学校の養成課程には、医療的ケアの学びも義務づけられるようになっており、これを教える教員も必要となっている。
- 県立高校では、福祉系高等学校は津久井高校1校しかなく、県内全域から津久井高校に通うのは難しいため、資格取得を目指す中学生にとっては進路選択における課題がある。また、ICTの活用や介護ロボットなど新たな福祉機器を活用した福祉実践への対応も課題としている。
- このことから、養成校の拡充や施設設備の充実、教育の確保等を方向性として挙げている。

(角田会長)

- ・ 報告書の内容についての御意見もいただきたいが、この報告書の内容を進めるにあたり、具体的にどのようなことを学校や教育委員会に考えてもらう必要があるのか、実現するためにはどうしたらいいのかなどの御発言もいただきたい。

(目迫委員)

- ・ 現在、デュアルシステムを行なっている学校の課題は検証しているのか。また、協議会の在り方について、教育委員会の構想をお聞かせ願いたい。

(濱田部長)

- ・ 協議会については、各教育振興会や企業の支援をいただきたい。
- ・ その他、学校関係者にも入っていただきながら、組織を作っていくことが必要だろうと思っている。

(小池グループリーダー兼指導主事)

- ・ 専門部会において、学校職員から多くの課題を挙げていただいた。報告書の中に書いていないものもあるので、新しい組織で課題を解消するための方策を考えていきたい。

(熊坂委員)

- ・ 「かながわデュアルシステムパイロットプログラム」というネーミングはもう少し検討していただきたい。例えば、「かながわデュアルシステム・コラボレーションプログラム」など、何か良いネーミングを考えていただいた方がよい。

(角田会長)

- ・ このプログラムは非常に期待している。全国的にも注目されるような事業に発展していただきたいと思う。
- ・ また、専門学科の枠を超えたということで書かれているが、普通科とのコラボも考えて欲しいと思う。専門学科は普通科に対して色々な影響を与えられるはずである。普通科も含めた形での教科横断的な取組を進めて、神奈川の産業人材を広く深く育てていかなければならないと思う。

(渡邊委員)

- ・ 准看護師養成施設については設置数及び入学定員数ともに大幅に減少しているという表現があるが、平成30年3月に准看学校はすべて閉校している。一つだけ残っている、自衛隊の准看学校を踏まえて「減少した」と表現しているのだと思うが、記載の文言については考えてほしい。

(角田会長)

- ・ この件については、渡邊委員と事務局で調整をお願いします。

(小池グループリーダー兼指導主事)

関係する部署とも相談して、その上で考えさせていただきたいと思う。

(佐藤委員)

- ・ 前任が前回、発言した働き方改革関連の部分については、控え目ながらも入れていただいているので、感謝を申し上げたいと思う。
- ・ 学校側としても、生徒を企業で実習させることについて、相当な配慮が必要になってくるのではないかな。そういう意味では、最後の文言のところにもあるように、今後のありようについて絶えず検討するという視点が必要なのではないかと思う。
- ・ これから取組む専門学科のデュアルシステムについては、ぜひ広く発信していただきたい。普通科等にも関係する内容があるのではないかな。

(倉田委員)

- ・ 本校では、高校の中では資格が取れないという中で看護教育を行ってきたが、それでも毎年2クラス、看護科80名の生徒は3年間思いをより強くするという形で看護の世界に進んでいくという状況がある。
- ・ 学校の環境から、福祉科の生徒たちも影響を受けて看護に進むということで80名から90名ぐらい

の生徒たちが、看護に関する上級学校に進み、さらに地元の神奈川県内の看護師になっていくという現状がある。

- これからの看護師に求められている能力を踏まえて、共通教科の重要性というのは認識しているが、単に学力を上げるために共通教科を増やすといった視点ではなく、看護の道に進むにあたってどのような学びが必要なのかをよく検討する必要があると思う。
- 本校の生徒の現状も踏まえて、お考えいただけたらと思う。

(角田会長)

- 新しい形のデュアルシステムについて、神奈川県の特設高校が率先して取り組んでいただきたい。また、看護と福祉の学科のあり方については、看護人材や介護福祉人材の重要性を痛感しているところで、その職を目指す若者たちをどう支援していくかということも継続して考えていきたい。この職種の素敵さや深さをもっと伝えていくということも、県全体でやっていかなければならないことかと思う。

5 事務連絡

◇最終報告完成までの流れ